

## 卒業にあたって

6年 石田 陽子



2000年を迎え、私たちもいよいよ卒業することになりました。6年間という長い間、本学で学生として過ごしてきましたが、課外的に行っていた口腔解剖学第一教室での研究について少し書かせて頂こうと思います。私は専門課程に進級してからまもなく、先生方のお誘いを受けて口腔解剖学第一教室の輪読会に参加することとなり、さらに実験の基礎的手法を教えて頂いたりして、春休みなど時間のあるときに実験室にお邪魔していました。4年生くらいになると臨床科目の授業や実習が主となり、基礎医学の教室とは関わりがなくなるのですが、せっかく親しくさせて頂いた先生方と疎遠になるのは残念な気がして、やはりちょっとした時間を見つけては医局に遊びに行っていました。学生の身分で勝手に遊びに行っているわけですから、当然研究テーマなどはなかったのですが、何か自分でやってみたい気持ちが募り、再生能の高い魚類の歯について、教えていただいた手法を全部使って観察してみることにしました。臨床実習に入ると、なかなか実験を進めることができにくくなりましたが、SCP（ステューデント・クリニシャン・プログラム）という歯学部学生向けの研究発表大会があることを知り、たいへん関心を惹かれ、小澤教授・江尻助教授をはじめとする口腔解剖学第一教室の先生方、また河野教授・研究員のラウル先生はじめ歯科補綴学第一教室の先生方にご協力をいただき、参加することにしました。SCPはもともとADA（アメリカ歯科医師会）で40年も前から行われていた歯学生参加のコンペティションで、5年前から日本選抜大会が開催されるようになりました。コンペティションですから、審査があり、1位になるとADA総会に招待されます。パネル作り・原稿書き・英文校正など何一つ自分一人ではできず、非常にたくさんの方々のお力を借りて、何とか発

表してくることができました。クリニシャン・プログラムですので、研究テーマは臨床に即したものであることが望ましいのですが、私はいわゆる比較解剖学的な研究でしたので、残念ながら上位をいただくことはできませんでした。しかし、研究をまとめること・人前で発表することへの変容と充実感を知ることができ、また全国の歯科大学の学生の方と知り合い交友を深めることもできました。自分が思っていた以上に多くのことを学べたように思っています。一方で、同じテーマを日本語でまとめ直し、11月の新潟歯学会第二回例会でも発表させていただきました。この時は学内の先生方から毎日のように声をかけられ、たいへん照れくさかったのですが、非常に興味を持ってくださった先生もいらして、激励の言葉がとても心に響きました。

卒業後は、臨床と研究の両方を頑張りたいと思い、また以前から補綴科に進みたいと思っていたので、本学歯科補綴学第一教室の大学院に進学することにしました。今後、修行・研究に励みながら、学生時代にお世話になった先生方に何かの形でお手伝いできればと思っています。

また、来年度SCPに参加して下さる学部生の方を募集しております。興味を持たれた方、下記までご連絡下さい。

E-mail : d94a007a@dent.niigata-u.ac.jp

## 歯学部卒業にあたって

6年 中里 隆之



総診も何とか無事終了し、あとは国試を残すのみとなりました。卒業するにあたり、まず新潟大学で学ぶ機会を与えてくれた両親に感謝したいと思います。

6年間をふりかえると、本当にいろいろなことがありました。希望に満ちて入学したはずなのに、耳に入ってくるのは“歯科医師過剰”などと暗い話題ばかり…。おまけに試験・実習は厳しいときたものだから、選択を誤っ

たと本気で思った時期もありました。現在も歯科医療を取り巻く状況は厳しいようですが、選択を誤ったとは今は思いません。総診での臨床実習を通して、歯科医療の“やりがい”のようなものを実際に感じる事ができたからです。総診で学べることは、新潟大学歯学部最大の特徴です。あちらこちらで総診が廃止になるという噂を耳にしますが、何とかこの良い伝統は続けていって欲しいものです。総診で得られるものは本当に大きく、患者さんからの“ありがとう”の一言がこんなに重いものだとは思いませんでした。私の方こそ、本当にありがとうございました。

4月には新潟を離れ、今度は地元の大学で学ばせていただく予定です。出身大学ではなく、まして歯学部ではないのでいろいろと不安もあります。自分に何ができるか分かりませんが、大橋教授の最終講義にもあったように“診断”というものに重点を置き、諸先生方や患者さんから学んだ“医療人”としての意識を忘れることなく努力していきたいと思います。また最後になってしまいましたが、同期生のみんな、戸嶋班長を中心とした3B班の鳥巢・野村、に本当に感謝します。

## 歯学部卒業にあたって

6年 服部 史子



6年間という長い学生生活をふり返って、最も印象に残っていることはなんといっても、総合診療室での臨床実習（総診）です。4年生までは講義と模型を使った基礎実習が中心で、5年生の臨床予備実習（ポリクリ）では学生同士の相互実習が主でした。ところが、5年生の1月から始まった総診で私たちが向き合うことになったのは、モノ言わない模型でもなく、気心の知れた友人（学生）でもなく、お口に様々な悩みを持って通院してこられる、まぎれもない患者さんでした。当たり前のことですが、自分の担当している

患者さんと他の学生の患者さんとは、お口の状態、お困りになっていること、それぞれに対する治療は全く異なり、自分の担当する患者さんに対しては基本的に自分が全ての責任を負わねばなりませんでした。それはとても重圧のかかることで、翌日来られる予定の患者さんの治療内容については、我ながら綿密に予習をしたと思います。（予習に伴い、昔の講義や基礎実習の内容を振り返ることも多く、その大切さが6年になって身にしみてわかりました。）準備する道具、治療手順、さらには患者さんの様態を伺うための会話まで考え（予習）しましたが、当日になってみると患者さんのお口の状態をみて、突然予想外の治療を行わなくてはいけなくなったり、予想通りであっても始めて行う治療だと相当緊張しました。その度についてうろたえてしまったり、先生方から厳しい注意、指導をうけたり、何よりも患者さんに長時間の治療を強いることになってしまい、心苦しく思うことが多くありました。このようなつらい、大変なエピソードはあげればきりがありませんが、患者さん、先生方のおかげで実際に基づいた勉強ができ、多くのことを学び、とても充実した内容の濃い総診だったと思います。また、学問的な勉強ばかりでなく、患者さんや看護婦さんとお話する中で、患者さんに対する接し方や心配りを学ぶことができました。総診が修了する頃には患者さんから『先生のように優しくしていただいたのは初めてでうれしかったです。』と言って頂いたり、『信頼ある治療に感謝しています。卒後もお体に気をつけて』というお手紙で気づかいまでして頂いて、本当に涙が出るほどうれしく、1年間頑張ってきて良かったと心から思いました。

卒後は大学院へ進学し、さらに科学の目を養っていきたいと思います。そして、科学的根拠に基づいた医療を目指していくつもりです。が、その根底では常に「患者さんを（人）を診る」という「人」への気持ちを忘れない医療でありたいと考えています。卒業は、将来へのスタートであり、私たちはこれから走り（歩き）始めますが、目指すところは遠くともスタートのこの初心を忘れずに一步一步着実に進んで行きたいと思います。